

好ましい人間関係を育む学級づくりに関する研究 ～「学級づくりガイドブック」の再編集を通して～

千葉県総合教育センター
カリキュラム開発部研究開発担当
研究指導主事 濱田 素子

1 主題設定の理由

平成 25 年 3 月に発行された「学級づくりガイドブック」は、学級担任としての基本的な考え方として、教師と子供、子供同士の信頼関係の築き方、個を育てる、集団を育てる、規範意識を育てる、保護者対応などの内容がまとめられている。教職経験 1～6 年目対象の「あすなろ塾」や「学生のための教師未来塾」の講話・演習内容の根拠として、また、新規採用者を対象とする研修会においても参考資料として紹介されるなど、数多く活用されている。

コロナ対応としてオンライン授業や動画配信など ICT 活用は、その速さが加速している。GIGA スクール構想により「1 人 1 台端末」の整備が進めば、子供たちの学習形態は多様になり、学習環境は急激に変化していくことが予想される。

第 3 期千葉県教育振興基本計画「次世代へ光り輝く『教育立県ちば』プラン」において、千葉県教育をめぐる現状と課題の中に、「Society 5.0 への対応」「自己肯定感、自尊感情の向上」「誰一人取り残さない教育の実現」があげられており、基本目標 1「ちばの教育の力で、志を持ち、未来を切り拓く、ちばの子供を育てる」の施策 1「人生を主体的に切り拓くための学びの確立」の中で「(1) 子供の学習意欲を高め学力向上を図る取組の推進」として、「よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取り組みの充実」が述べられている。またその関連として、基本目標 2「ちばの教育の力で、『自信』と『安心』を育む学校をつくる」の施策 5「人間形成の場として活力のある学校づくり」の中の「(2) 豊かな学びを支える学校・学習環境づくり」をあげている。

「学級」は「規範」の元であり、「個」が育ち、それぞれの「人間関係づくり」によってより良い「集団」になることを目指すものである。他を思いやる気持ち、子供同士の切磋琢磨、自己肯定感につながる自己有用感を高めることなど、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越えていける力が求められている中、学級づくりの重要さはさらに大きくなると考えられる。また、よりよい人間関係を作っていくことは、学級づくりに留まることなく、子供たちの生涯にわたって様々な環境で育まれていくものである。

「学級づくりガイドブック（平成 25 年 3 月発行）」に述べられている内容を軸に、再編集を通して新しいニーズに応じられる、これからの人間関係づくり、自己有用感の向上を目指す学級づくりの方向性を明らかにし、学級づくり、人間関係づくりについて再度考える機会、教師の日常的な研修につながるようなガイドブックとして発信をし、県内に広く周知していく。

2 研究の目的

「学級づくりガイドブック（平成 25 年 3 月発行）」の再編集を通して、これから

の人間関係づくり、自己有用感の向上を目指す学級づくりの方向性を明らかにする。

3 研究計画

研究年度 1 年目 (令和 3 年度)	○実態把握 ○研究計画立案	○文献調査 ○ガイドブック内容検討
研究年度 2 年目 (令和 4 年度)	○実践校の選定 ○よりよい人間関係作りのための手立て(活動)の実践例 ○自己有用感向上のための手立て(活動)の実践例 ○ガイドブックの作成(暫定版 Web アップ)	
研究年度 3 年目 (令和 5 年度)	○ガイドブックの作成(改訂版 印刷製本 配布) ○リーフレットの作成	

4 研究概要

今日的教育課題に対応していくための「学級づくりガイドブック(平成 25 年 3 月発行)」の再編集を通して調査研究を進める。

基礎研究として、「学級づくり」に関わる文献調査、実態調査を行い、研究の方向性を明らかにする。また、実践的研究として、県内の学級経営に優れた取組・実践例を集め、よりよい人間関係づくりのための手立てや、自己有用感向上のための手立てについて研究を進める。

5 今年度の取組

(1) 「学級づくり」に関する実態調査結果

県内小・中・義務教育・高等・特別支援学校に在籍する教員経験 1 年目から 10 年目の教員を対象にアンケート調査を実施し 4,658 名から回答を得た。

アンケート項目については、前回の調査(平成 24 年度)と同様の内容を実施することで、教職員の意識の変化を捉えることとした。

○学級づくりを進める上でどのようなことに力を入れていますか？
(特に力を入れていること 3 つを選んでください。)

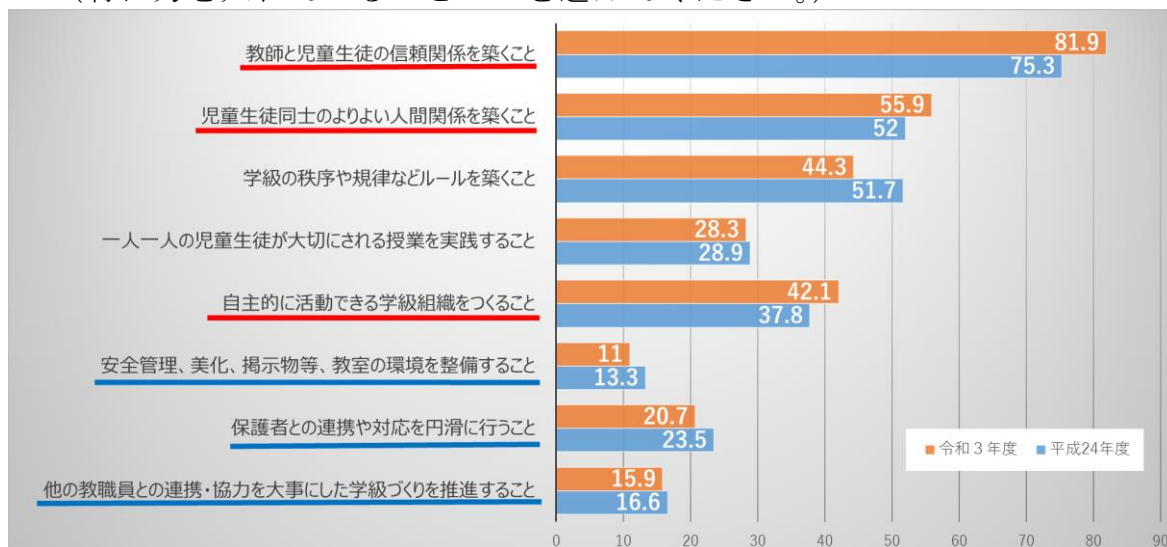
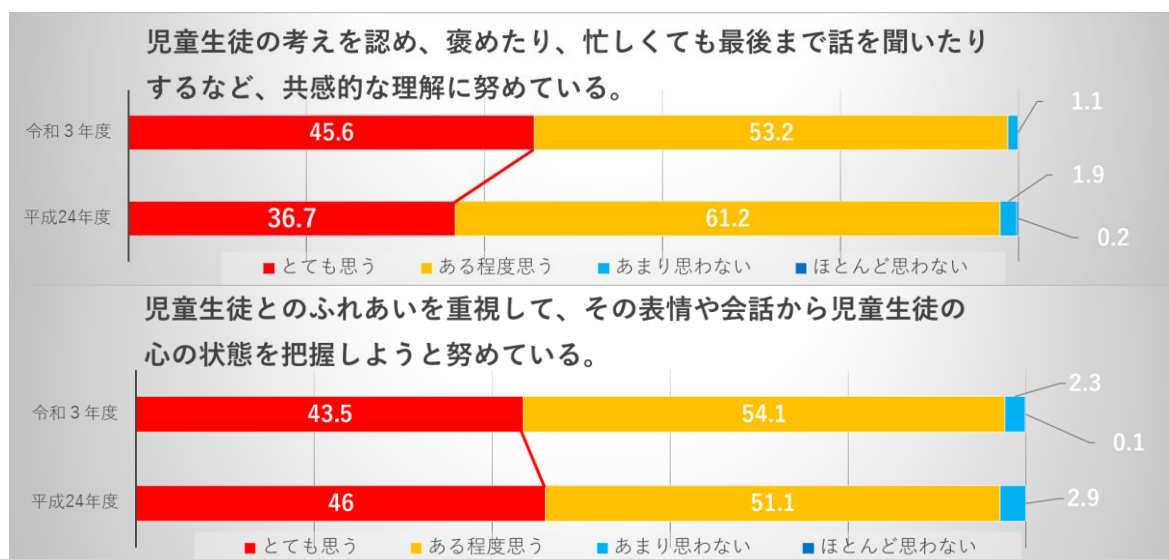


図 1

特に力を入れて取り組まれていることは、「教師と児童生徒の信頼関係を築くこと（＋6.6）」「児童生徒同士の人間関係を築くこと（＋3.9）」「自主的に活動できる学級組織をつくること（＋4.3）」の三項目で、平成24年度と比べ、学級づくりを進める上での意識が高まっていることがわかった（図1）。

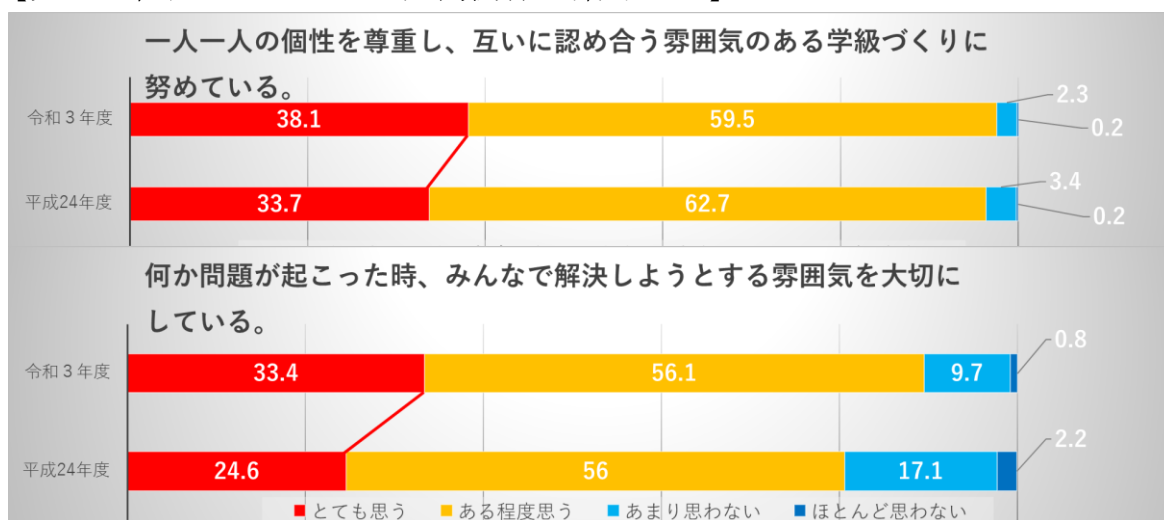
そこで、実際に学級づくりを進める上で、普段どのような行動をとっているかという質問について、その三点の項目に関する回答を詳しく見てみた。

【教師と児童生徒の信頼関係を築くこと】



平成24年度と比較し、「児童生徒の考えを認め、褒めたり、忙しくても最後まで話を聞いたりするなど、共感的な理解に努めている」ととても思うと回答した教員の割合が8.9%増加した。その一方で、「児童生徒とのふれあいを重視して、その表情や会話から心の状態を把握しようと努めている」ととても思うと回答した教員の割合は、平成24年度に比べ2.5%減少した。これは、コロナの影響を受け、ソーシャルディスタンスを取ることやマスクを着用しての学校生活が主流となったためと推察される。

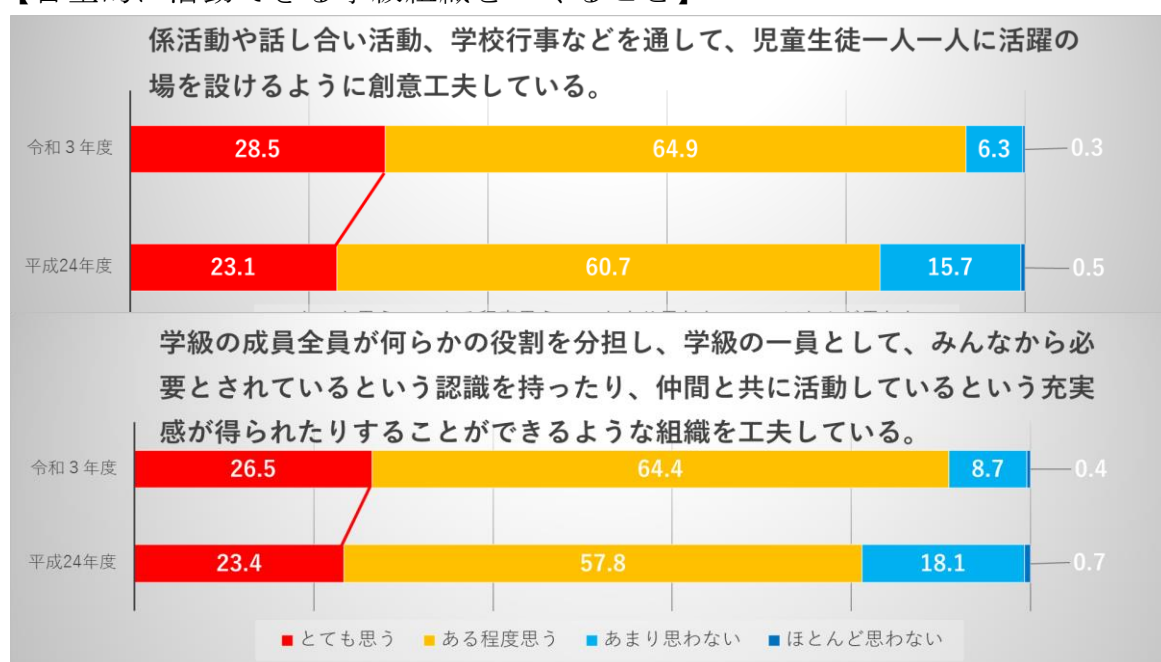
【児童生徒同士のよりよい人間関係を築くこと】



平成 24 年度と比べてみると、「一人一人の個性を尊重し、互いに認め合う雰囲気づくりにとても努めていると思う」と回答をした教員の割合が 4.4 % 増加した。

さらに、「何か問題が起こった時、みんなで解決しようとする雰囲気をとても大切にしていると思う」と回答した教員の割合は 8.8 % 増加している。これは、平成 25 年 6 月にいじめ防止対策推進法が公布されて以降、どんな小さな問題でも教員一人一人が真摯に子供たちと向き合ってきたからではないかと推察される。

【自主的に活動できる学級組織をつくること】

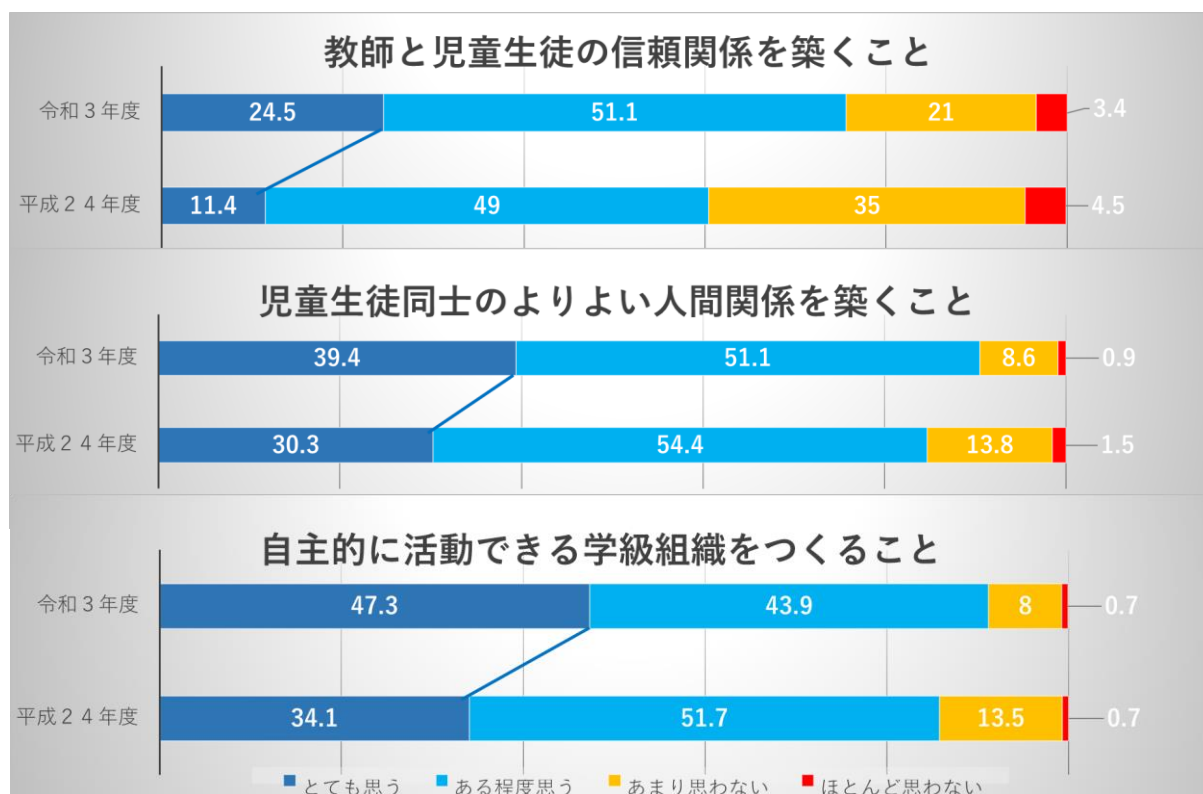


平成 24 年度に比べ、「係活動や話し合い活動、学校行事などを通して、児童生徒一人一人に活躍の場を設けるように創意工夫している」ととても思うと回答をした教員の割合は 5.4 %、「学級の成員全員が何らかの役割を分担し、学級の一員として、みんなから必要とされているという認識を持ったり、仲間と共に活動しているという充実感が得られたりすることができるような組織を工夫している」ととても思うと回答をした教員の割合は 3.1 % 増加している。これは、一人一人を大切にしたい個が生きる学級組織づくり、そして「特別活動」への意識が高まってきたことが推察される。

以上のことから、特に力を入れて取り組まれている「教師と児童生徒の信頼関係を築くこと」「児童生徒同士のよりよい人間関係を築くこと」「自主的に活動できる学級組織をつくること」の三項目において、普段から意識した積極的な取組がされていることが分かった。

しかし、「学級づくりを進める上で難しいと感じていることはどのようなことか」という質問について、上記の三点について詳しく見てみると以下のような結果となった。

【学級づくりを進める上で難しいと感じていること】



平成24年度と比べ、「教師と児童生徒の信頼関係を築くこと」において13.1%、「児童生徒同士のよりよい人間関係を築くこと」については9.1%、「自主的に活動できる学級組織をつくること」においては13.2%が、とても難しいと回答した教員の割合が増加しており、取組への困難さを感じている教員が多いことが分かった。

これらのことから、普段から意識して積極的に取り組んでいるものの、児童生徒との信頼関係をどう築いていくのか、その上で、児童生徒同士の人間関係をどう深めていくのか、そして、児童生徒一人一人が自主的に活動できるような学級組織をどう築いていくのかということを日々悩み模索し、どうしたらよいのかその解決策、方法等が求められていることがわかった。

さらに、どのような学級をつくりたいかという自由記述回答をみると、「児童生徒同士の人間関係」に大きく関わる部分（図2）や、「自主的な学級組織づくり」に関わる部分（図3）の回答がみられた。

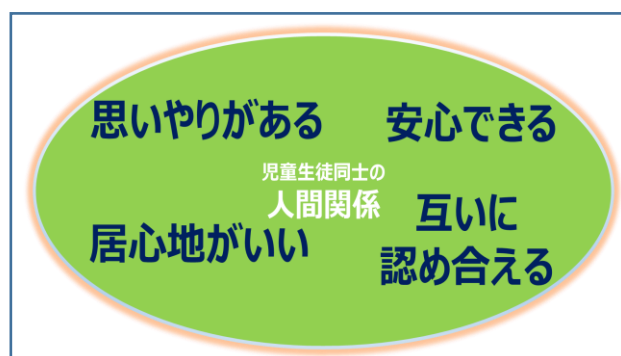


図2

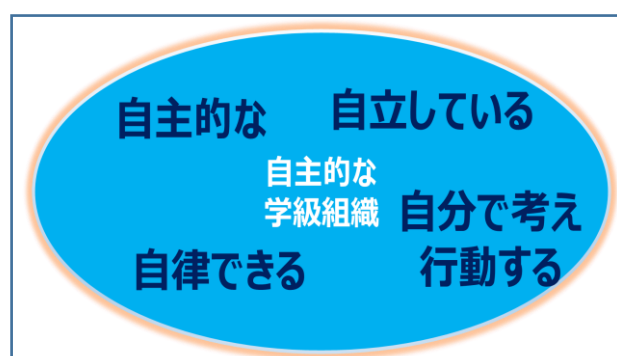


図3

そして、最も回答の多かった「楽しい学級、明るい学級、笑顔あふれる学級」をつくっていくためにも、やはり、「児童生徒との信頼関係」「児童生徒同士の人間関係」「自主的な学級組織」の三つの柱が相互に関わっていくことで(図4)教員が求めている学級の姿へとつながっていくのではないかと考えた。

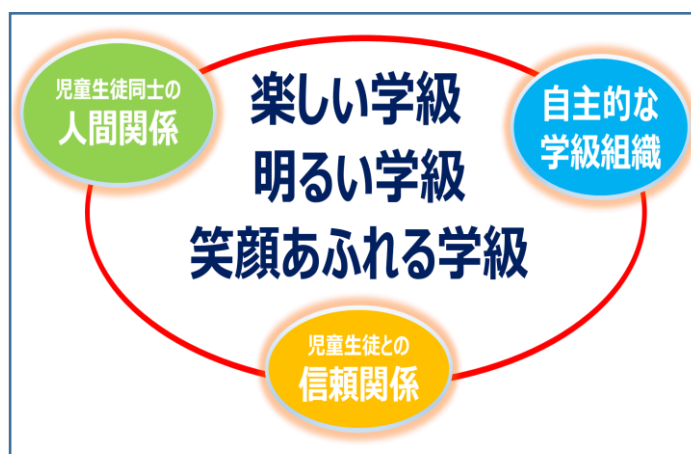


図4

(2) 「学級づくり」に関する文献調査

ア 学習指導要領における学級づくりの位置づけ

学習指導要領解説「総則編」では、「学習や生活の基盤として教師と児童(生徒)との信頼関係及び児童(生徒)相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること」と述べられており、教師と児童生徒との信頼関係及び児童生徒相互のより良い人間関係を育てるために、学級経営の充実を図ることが示された。

また学習指導要領解説「特別活動」では、「学級活動における児童(生徒)の自発的、自治的な活動を中心として、個々の児童(生徒)についての理解を深め、教師と児童(生徒)、児童(生徒)相互の信頼関係を育み、学級経営の充実を図ること。」と示されている。

そして、今回の指導要領改訂において特別活動では、育成すべき資質・能力の重要な視点として、「人間関係形成(個と個や個と集団の関わりの中で、互いの良さを生かし、協働して取り組み、よりよい人間関係を築こうとする視点)」「社会参画

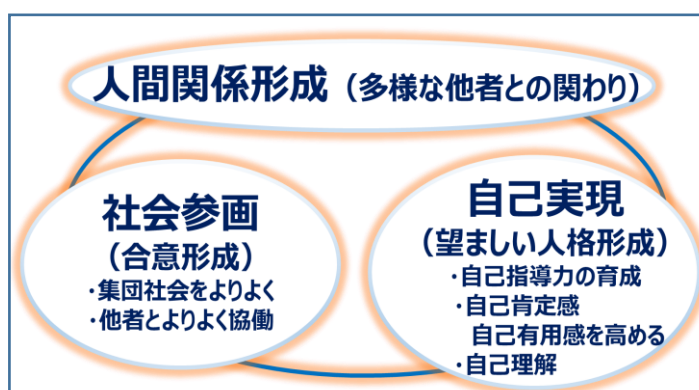


図5 特別活動において育成すべき資質・能力

(児童が現在、そして将来に所属する様々な集団や社会に対して積極的に関わり、よりよいものにしていこうとする視点)」「自己実現(将来を見通して、今の自分にできることを考え、よさや可能性を生かして実践しながらよりよい自分づくりを目指す視点)」があげられている。(図5)

イ 第3期千葉県教育振興基本計画から

千葉県教育をめぐる現状と課題の中に、「本県で生まれ育った子供たちが、自信を持ち、『楽しい』『喜び』に満ちた社会の担い手として成長することができるよう、子供たちの自己肯定感を高める取組を進める必要があります。」と述べられており、自己肯定感、自尊感情を高める取組

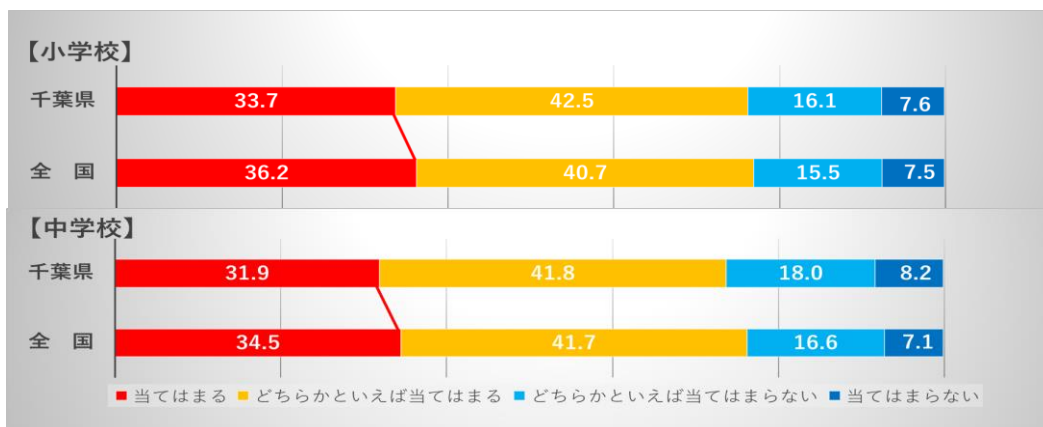
の必要性が取り上げられている。

また、千葉県教育の目指す基本理念の「『県民としての誇り』を高める！」の中で、「子供たちが、自己有用感に裏付けられた自己肯定感を高め、県民としての誇りを持って、未来への第一歩を踏み出すためには、県民の学校教育への参画のもと、学校では教師が、家庭では親が、地域においては地域住民が、それぞれの立場から子供たちに関わっていくことが重要です。」と述べられており、子供たちが、自己有用感に裏付けられた自己肯定感を高めていくことが示されている。

さらに、主題設定の理由でも述べたように、「施策１の（１）子供の学習意欲を高め学力向上を図る取組の推進」や、「施策５の（２）豊かな学びを支える学校・学習環境づくり」の中でも、よりよい学習活動を支える学校・学級づくりに向けた取組の充実が示されている。

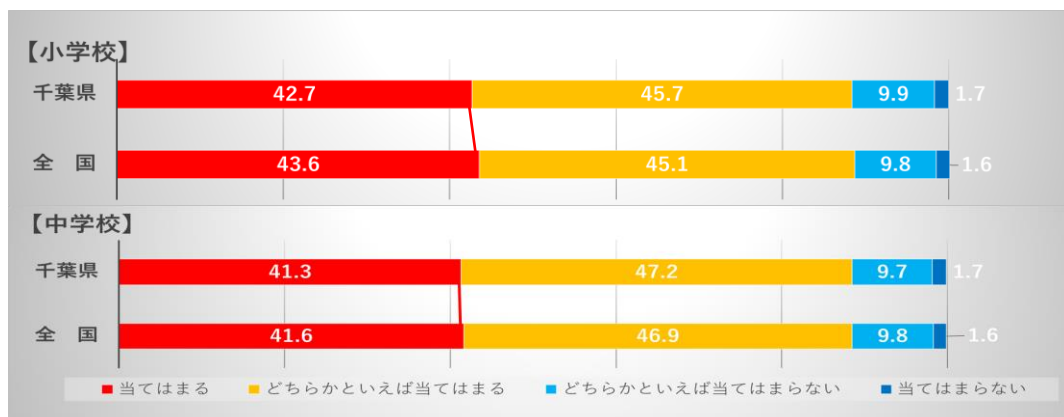
ウ 令和３年度全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙結果から

【質問番号（６）自分には、よいところがあると思いますか】



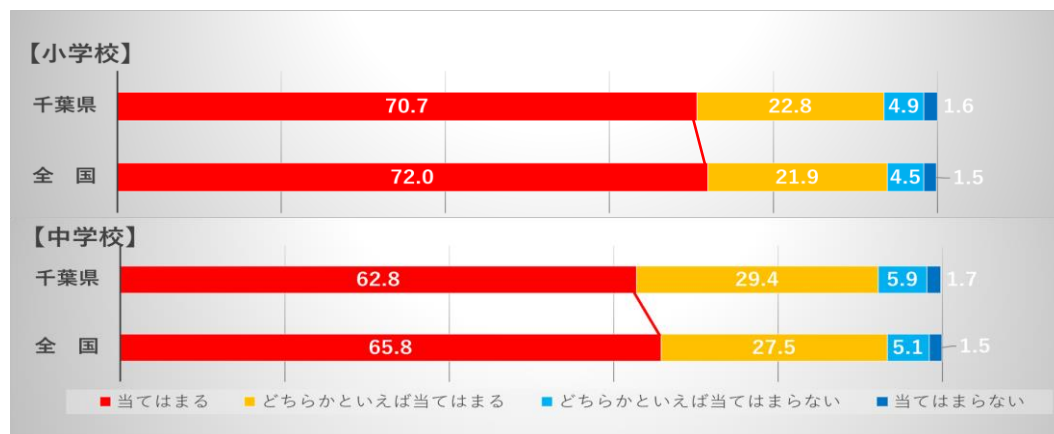
「当てはまる」と回答した児童生徒は全体の三割程度で、全国に比べ、小学校で２．５ポイント、中学校で２．６ポイント低い。

【質問番号（１０）人が困っているときは、進んで助けていますか】



「当てはまる」と答えた児童生徒は全体の四割程度に留まっており、全国と比べ小学校で０．９ポイント、中学校で０．３ポイント低い。

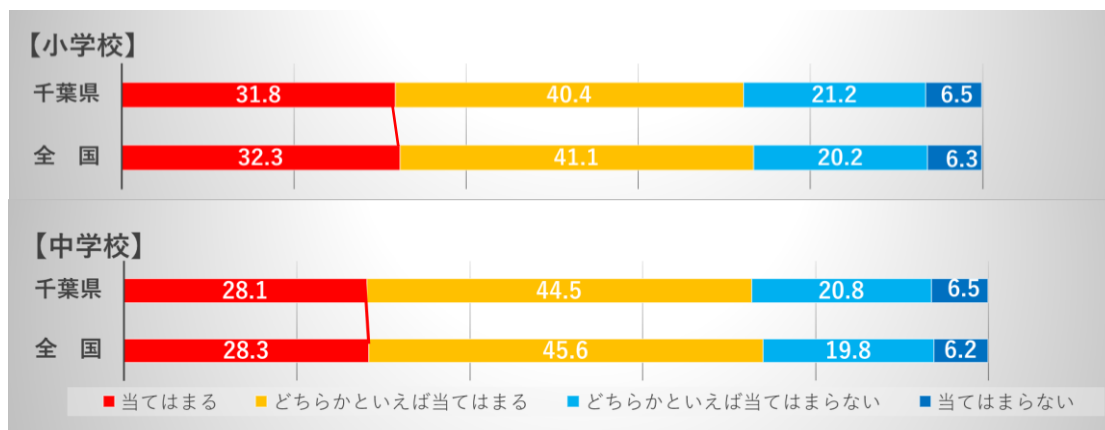
【質問番号（16）友達と協力するのは楽しいと思いますか】



「当てはまる」と答えた児童生徒の割合は、小学校で七割、中学校で六割を超えているが、全国と比べ小学校で1.3ポイント、中学校で3ポイント低い。

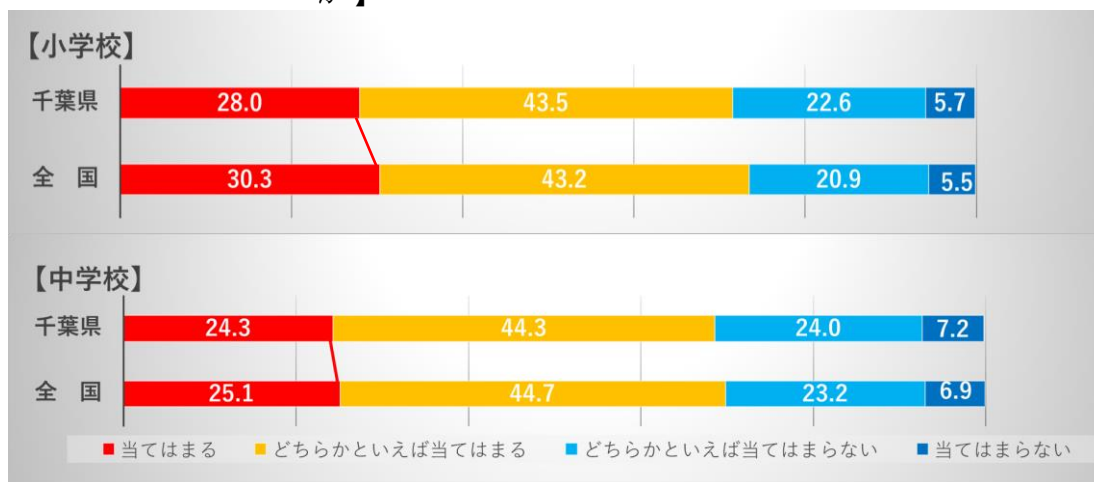
これらのことから、自己肯定感を高めていくことの必要性、そして、児童生徒同士の人間関係をさらに高めていく必要性があると考えられる。

【質問番号（40）あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか】



「当てはまる」と回答した児童生徒は全体の三割程度で、全国に比べ、小学校で0.5ポイント、中学校で0.2ポイント低い。

【質問番号（４１）学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいますか】



「当てはまる」と回答した児童生徒は全体の三割程度で、全国に比べ、小学校で0.5ポイント、中学校で0.2ポイント低い。

これらのことから、学級活動を通して支え合い、高め合う集団にしていくためにも、学級経営の充実を図っていく必要があると考えられる。

以上のアンケート結果及び学習指導要領に示されている方向性、第3期千葉県教育振興基本計画、全国学力・学習状況調査を根拠に、「児童生徒との信頼関係」「児童生徒同士の人間関係」「自主的な学級組織」の三点を柱に調査研究を進め、学級づくりガイドブックの再編集へとつなげていきたいと考えた。

6 次年度の研究の方向性について

「児童生徒との信頼関係」「児童生徒同士の人間関係」「自主的な学級組織」三点を柱とし、以下の内容についてさらに研究を進めていく。

(1) 一年間の流れが見通せる形を検討していく。

(ガイドブックの構成及びリーフレット)

(2) 児童生徒の発達段階、学級の成長段階に応じた学級づくりの視点を取り入れる。

(3) より具体的な実践例を取り上げていく。

(4) 校種別に応じた内容の記載（コラム）を織り交ぜていく。

また、「学級づくりを進める上でどのようなことに力を入れていますか？」というアンケートの質問事項において、全体の項目の中でも積極的な取組が低く、平成24年度と比べても回答が減少している三つの項目がある（図1）。

さらに、実際に学級づくりを進める上で、普段どのような行動をとっているかという質問について、その三点に関する回答を詳しく見てみた（図 6）。

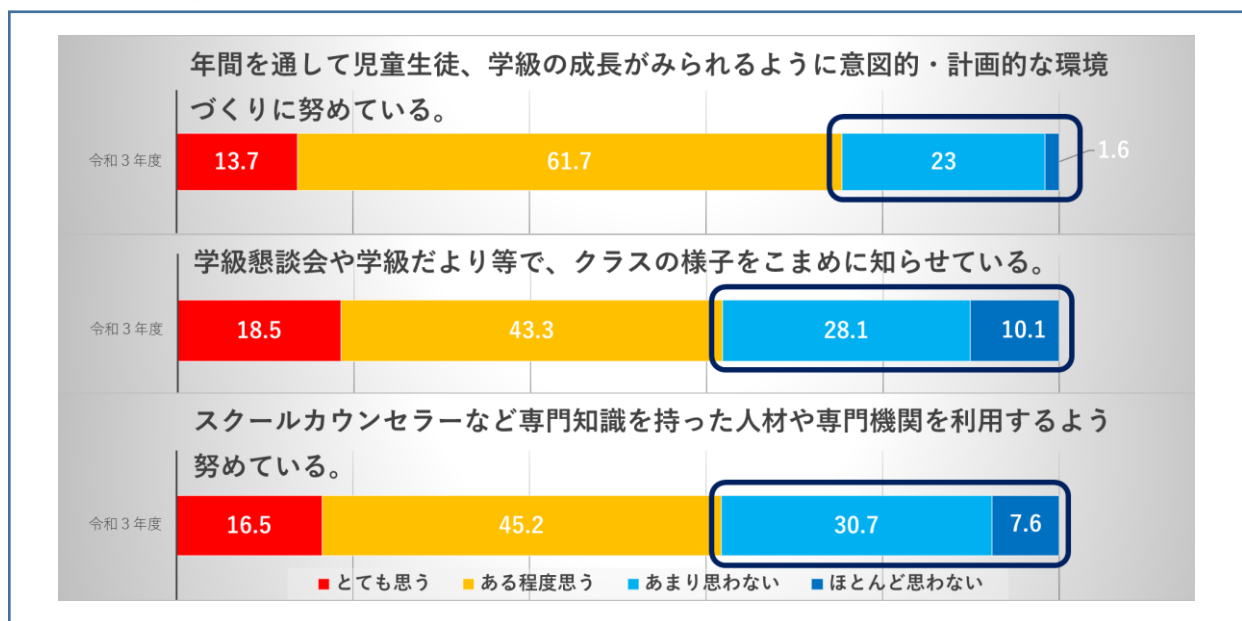


図 6

特に、「年間を通して児童生徒、学級の成長がみられるように意図的・計画的な環境づくりに努めている。」こと、「学級懇談会や学級だより等で、クラスの様子をこまめに知らせている。」こと、「スクールカウンセラーなど専門知識を持った人材や専門機関を利用するよう努めている。」ことについて、全体の二割から四割に当たる先生方が、「あまり思わない」「ほとんど思わない」と回答しており、積極的な取組がみられないことがわかる。

以上のことから、以下の内容についても研究を進めていきたいと考えている。

- (5) 教室環境について（学級の成長がみられるような環境づくり）
- (6) よりよい保護者との連携について（ICT の活用）
- (7) 外部人材・関係機関の活用・連携・協力体制づくりについて

令和 3 年度 『全国学力・学習状況調査』児童生徒質問紙において、「学校に行くのは楽しい」と答えた児童生徒が五割に届いていない現状が、これからの人間関係づくり、自己有用感の向上を目指す学級づくりの方向性を明らかにしていくことで、少しでも改善していけるよう、学級づくりガイドブックの再編集を通して、今後も研究を進めていきたい。